

# ビルマ都城モデルの研究（その2） ペゲーモデルの提示と ビルマモデルの系譜に関する研究

山田 耕治<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 玉野総合コンサルタント（株）海外プロジェクト部・技師長  
（〒116-0013 京都荒川区西日暮里2-26-2）

E-mail: yamada-ki@tamano.co.jp

アジアの都城のモデルとしては古代インドモデル、古代中国モデルが知られている。筆者は（その1）の発表論文の中で、ビルマ王国の王都の分析により、これまでに知られていた方形の各辺に3門を持つマンダレーモデルに加え、ペゲーなどの歴史的王都にみられる各辺に5門を持つペゲーモデルが提起しうることを述べた。

本論文（その2）では、1) トウンゲー、2) ペゲー、3) シュエボーの3つのビルマ王国の歴史的王都の分析により、方形の各辺に5門を持ち、同心周帯の土地利用、東向き軸性をもつペゲーモデルを提起する。また、マンダレーモデルとペゲーモデルの二つのビルマ王国に特有の都城モデルの歴史の変遷を概観することにより、ビルマにおける都城モデルの系譜について論じる。二つのビルマの都城モデルは、古代インドモデルのサブモデルとして位置付けられる。

**Keywords:** Mandalay, Pegu, Burma, Capital City, Spatial Structure, Model

## 1. はじめに

### (1) 背景

アジアの都城のモデルとしては古代インドモデル、古代中国モデルが知られている。筆者は先行研究においてイギリスによる植民化以前のビルマ王国（現ミャンマー）最後の王都であるマンダレーの空間構造の分析から、マンダレーモデルと呼ぶべき都市モデルを提示した<sup>1)2)</sup>。また、別の先行研究では、マンダレーモデルのビルマ歴史的王都への適用性を検討した<sup>3)</sup>。さらに本研究発表会の（その1）の発表論文の中で、ビルマ王国の王都の分析により、マンダレーモデルに加え、ペゲーなど複数の歴史的王都にみられる各辺に5門を持つペゲーモデルが提起しうることを述べた<sup>4)</sup>。

### (2) 先行研究

#### a) アジアの都市モデル

アジアの都市モデルに関しては、二つの特徴的な都城モデルが提示されている。応地利明による古代インドモデルと古代中国モデルである<sup>5)</sup>。

古代インドの都城のモデルは、BC2世紀からAD4世紀にかけて書かれた文献で都城の建設に関する記述が含

まれるアルタシャストラなどによる。Kirkによれば、アルタシャストラの都城とは下記のようなものである。理想的には、都城は、幾何学的な形状—通常は方形—をもつ、とされ、通年枯れることのない水源により補給され、ワニが放たれた複数の濠とレンガ造の壁をもつ土塁に囲まれている。方形の各辺には3つの門が建造され、これらを結ぶ3本の道路が東西および南北に走り、城内を16の区画に分割する、王宮は、その中庭を含め、中央北側の二つの区画を占める<sup>6)</sup>。

古代中国の都城モデルは、BC3世紀ころに編纂された「周礼考工記」および8世紀に編纂された「礼記」に由来する。考工記では都城を方形で、辺の長さが9里（約3.6キロメートル）、各辺に3門を有すると規定している。中央には王宮があり、祖廟を左側に、社稷を右に有し、（王宮の）前に朝廷、後に市を配する<sup>7)</sup>。「礼記」は北が最も重要な方角であるとし、皇帝は南を向いて座り、宮廷はその南に、市は北に配置されている<sup>8)</sup>。

古代インドおよび中国モデルの概念図（応地による）を図1に示す。両者は方形の都城を城壁が取り囲み、各辺に3門が配置されている点が共通する。しかし、両者には少なくとも2つの相違点がある。第一の相違は、古

代インドモデルは同心円的な構造をもち、特定の方位によらないが、中国モデルでは君子南面といわれるように宮城は南を向き、中央部の南北のベルト上の軸性がある。朝鮮半島や日本など、古代中国モデルの影響を受けた都城の多くは南北の軸性が認められる。第二の相違は中央に配置される施設である。インドモデルでは寺院などの宗教施設が占めるが、中国モデルでは王宮である。

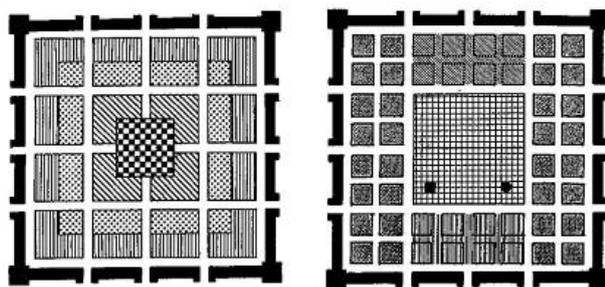
### b) ビルマの都市モデル

ビルマにおける都城については、筆者のマンダレーに関する先行研究<sup>9) 10)</sup>において、ビルマにおいて、古代インド、古代インドモデルなどに類似した都市モデルが存在するのではないかと推測され、そのモデルについて空間構造、軸性、土地利用およびサイズの面から検討し、マンダレーモデルを提示した。マンダレーモデルの特徴の一つは東向きの軸性である。

筆者が先行研究で提示したマンダレーモデルを図2に示す。提示されたモデルは、インドおよび中国のいずれのモデルとも類似点があるが、ビルマに特徴的であるのは東向きの軸性である。インド、中国モデルの比較対比を表1に示す。

### (3) 本研究の目的

本論文(その2)では、1) トウンゲー、2) ペゲー、3) シュエボーの3つのビルマ王国の歴史的王都の空間構造、土地利用、軸性などの分析により、方形の各辺に5門を持つペゲーモデルを提起する。また、マンダレーモデルとペゲーモデルの二つのビルマ王国に特有の都城モデルの変遷を概観することにより、ビルマにおける都城モデルの系譜について論じる。



出典: 応地(2003), P.208 注: 凡例英訳は筆者による。

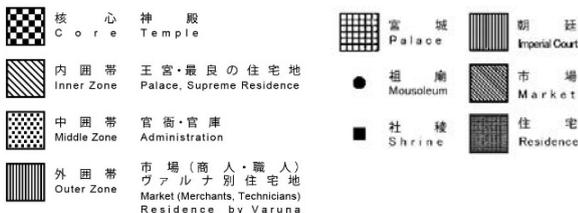
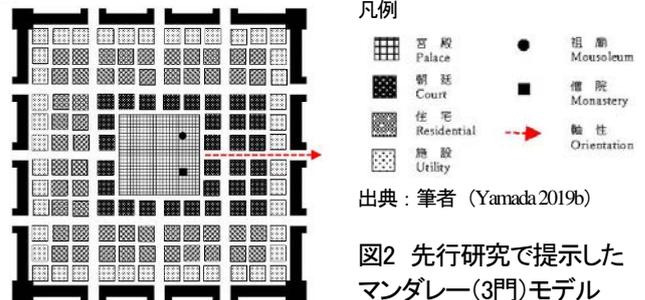


図1 古代インドモデル(左)および古代中国モデル(応地による)

表1 インドおよび中国モデルの比較

項目 Item	古代インド Ancient India	古代中国 Ancient China
基本構想 Basic Plan	同心周帯 Concentric circumambient belts 等方性 Isotropic	南北綫帯 North-south linear belts 非等方性 Non-isotropic (南向き軸性 Southward axis)
基本形態 Shape	方形 Square 旁三門 Three gates on each side 十六街区 Sixteen blocks	方形 Square 旁三門 Three gates on each side 十六街区 Sixteen blocks
核心施設 Central facility	中央神域 Temple	中央宮闕 Palace
宗教施設 Religious facility	中央神域に包摂 Included in the temple in the center	左 右 社 Mausoleum on the left (East); Shrine on the right (West)
官衙・市 Administration and Commerce	中朝外市 Court in inner belt; Commerce in outer belt	前朝後市 Court in the front belt; Commerce in the back belt
民間住居 Residence	外圍民廬 Outer belt	左右民廬 East/West ends

出典: 応地 P89、表1 (筆者が英訳)



出典: 筆者 (Yamada 2019b)

図2 先行研究で提示したマンダレー(3門)モデル

## 2. ペゲーモデルの検討

本章では、その1論文第4章において示唆された、各辺に3門を有するこれまで知られていたモデルに加え、歴史的王都ペゲー他の歴史的王都の分析により提示される各辺に5門を有する新たなモデルについて、(1)空間構造、(2)軸性、(3)土地利用の面から検討示す。検討対象は、トウンゲー、ペゲーおよびシュエボーの3つの歴史的王都である。なお、ビルマ王国の王都に関する歴史的背景は、その1論文の第2章に記述している。

### (1) 空間構造

#### a) ペゲー

ペゲーは、もともとMonが多く居住する地域にあったが14世紀にはPegu王国の王都となった。この時のPeguはShwe Mawdaw Pagodaの東側のひし形に近い不定形の都城であった。その後、Bayinnaung王が旧王都の西側に方形の新都を建造した。図3にペゲーの新旧の王都およびその周辺を示す<sup>11)</sup>。

Bayinnaung王のペゲーの図(その1論文図7参照)を見ると、王都はやや南北に長い方形であり、外側を濠が囲む。方形の各辺にそれぞれ5門が配置されており、それらの門を道路が結んでいる。すなわち、5本の大通りが東西と南北を結んでおり、このことから、王都は大きく縦横でそれぞれ6分割され、さらに、2本の大通り挟まれるブロックは、その中間で街路で分割されている。すなわち東西と南北がそれぞれ9本の通りにより10分割、全

体でみると10 x 10、すなわち100のサブブロックに分割されている。このように、5つの門とその中間の道路により、各辺が10に分割されているのが、5門モデルの基本形である。

また、王都の中央部に、サブブロックで4x4ほどの大きさの王宮があり、四方を壁に囲まれている。Chotimaは王宮内の建物の配置図を掲載している(図4)。王都のほぼ中心、王宮の西端に置かれたのが大謁見棟(Great Audience Hall)と呼ばれる王宮で最も重要な建物であり、9層の屋根を持つ伽藍があり、その中央真下には、いくつか設けられる王座の中でも最も重要な、「獅子の王座」が据えられた<sup>12)</sup>。大謁見棟の東側には、北棟、南棟と呼ばれ、王の臣下と軍関係者を収容する二つの建物が平行して置かれている<sup>13)</sup>。大謁見棟と北・南棟は東に向かいU字を構成するように配置されている。また一群の建物の東側には壁に囲まれた閉鎖空間があり、王の居室に加え、王妃、王室関係者の小規模な建物からなる居住区がみられる。

### b) トウンゲー

トウンゲーの空間構造は未解明の部分が少なくない。Chotimaによれば、図5に示すように、方形の各辺には5門ずつ、全部で20門があり、北から南と西から東に各門を繋ぐ道路が(東西5本、南北5本の)合計10本通っていた、としている<sup>14)</sup>。

他方、Kan Hlaは北および南辺にはそれぞれ5門、東と西辺には3門が設置されたと、Chotimaとは異なる推測している<sup>15)</sup>。本論文では、Chotimaが提示する空間構造が具体的かつ理路整然と整理されていることから、これに依る。

### c) シュエポー

シュエポーの空間構造を解明するのに役立つ資料の一つに、Langham-Carterの論文がある<sup>16)</sup>。そこにはシュエポー内城の平面図のスケッチが掲載されている(図6)。これをみると、シュエポー内城は市壁によって囲まれ、東側に5門、北に2門、西および南にそれぞれ3門があることが解る。内城の中央やや北側に、柵(Stockade)が囲む長方形の区画があり、その内側に内壁に囲まれた王宮が配置されている。ビルマ王国の王都では、門は内城の内側に繋がるように配置されるが、シュエポーの場合は、東側最北端の門であるHalin Gateは王宮内部の空間へつながるのではなく、城壁の外側に作られ、王宮の外側を通り西側の城外に繋がっている<sup>17)</sup>。

## (2) 軸性

軸性(orientation)とは、王都がどの方向を向いて構成されているかを指す言葉である。軸性は、主たる建物の方向や王都の主たる門の方向などにより判読される。筆者の先行研究で、マンダレーを始めとするビルマ王国

の王都にはマンダレーに代表されるように、東向きの軸性を持つものが多いことが明らかになっている。

### a) ペゲー

ペゲーの軸性については議論が分かれている。Aung-Thwinは、王宮で最も重要な獅子の王座およびMyenan(土で固めた王宮の基礎)の方向は、創建当時は西向きであったが、1990年代から2000年代の王宮再建の際に東向きに変えられた、としている。これは、西向きという不都合な特性を回避するためにそうされたようだと、と推測している<sup>18)</sup>。

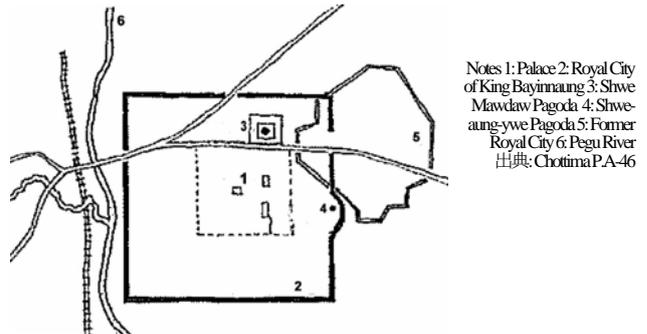
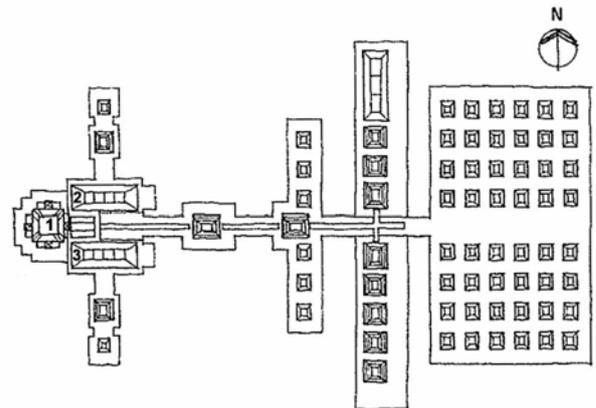
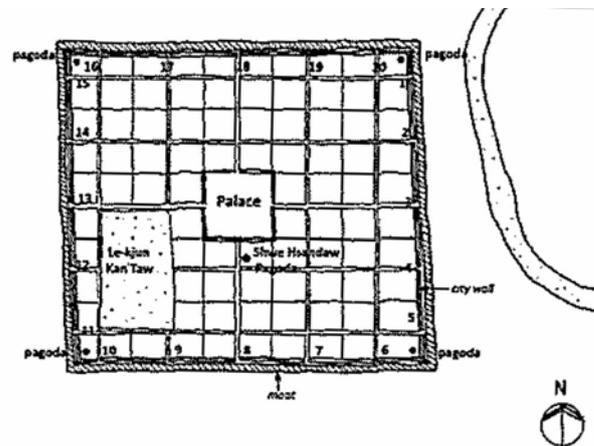


図3 Pegu王都および周辺



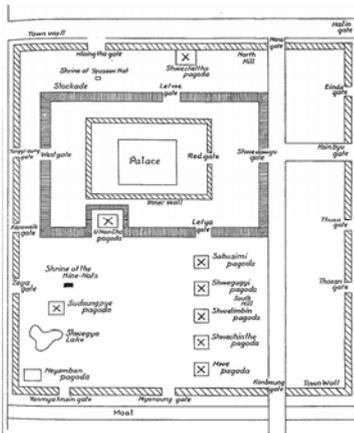
Note 1: The Great Audience Hall 2: North Building 3: South Building  
出典: Chotima.PA-47

図4 16世紀のPegu王宮の配置図



出典: Chotima.PA-48; Redrawn by Chotima

図5 Toungooの配置図



出典: Langham-Carter, P13.

図6 Shwedoの配置図

他方、Chotimaは図4に示した王宮の建物配置図をもとに、王都のほぼ中心に位置する王宮最大の建物である謁見棟の中央に、最も重要な王座である獅子の王座が据えられ、賓客はその東側の建物に通されたと考えられ、王座はおそらく東向きであったと推測している<sup>19)</sup>。たしかに配置図をみると、謁見棟の西側には建物がないことから、王座が東向きであったとの推論は理に適う。

また、重要な点は、門につけられた名前である。すでに述べたようにペゲーには各辺に5門、全20門があったことが知られているが、東側の5門の中央の門は「トウングー門」と呼ばれた<sup>20)</sup>。ペゲーはトウングー王朝の王都として建造されたことを考え合わせると、王宮の正面に位置する東側中央の門に王朝の本拠地の名前を付けたことは、その軸性の重要性を示すものと思われる。

こうした点から、本論文においては、王宮は17世末の創建当時、東向きの軸性をもってたと推論する。

#### b) トウングー

トウングーについて、Thaw Kaungはトウングーの各辺5門、計20の門のうち、Aungnan門と呼ばれる東門がメインの門である<sup>21)</sup>、とし、王都が東向きであったことを示唆している。

#### c) シュエポー

図6の王宮配置図からシュエポーの軸性を解明することができる。Langham-Carterは、王宮は中心部に位置し、謁見の間は王宮の東端にあり、そこに上る階段が設けられていたと記している。その配置について、「(19世紀前半の訪問者の) Baker大尉は、通りから東の門を通り、柵 (stockade) の東側の門を通ると、謁見の間で待つ王がみえた<sup>22)</sup>」としている。すなわち王宮の東側の門から城内に入り、そのまま柵の門を通ると謁見の間に至ることは、図からも確認できる。こうした点から、シュエポーの王宮も東向きであったことが解る。

### (3) 土地利用

古い時代の王都の土地利用に関するデータは限られている。5門モデルの適用対象の3王都の中では、ペゲーに関するデータがある。本項では、ペゲーの分割されたブロックごとの土地利用および主要施設の配置について論

じる。

ペゲーの土地利用に関するデータは、現地の旧王宮の復元建物にある王宮博物館において展示されていた、16世紀後半のペゲーの図である。この図には、王都のブロックごとの利用形態が記載されている<sup>23)</sup> (図7)。この図に記載されている土地利用の細目を、3つの機能に分類した。第一に王宮系 (Court) 機能で、大臣や知事に加え、王宮の運営に携わる召使 (Servant) などである。第2は居住系機能で、王子、親族などの王族の家屋と議員、知事などの公僕、加えて宗教施設がこれにあたる。第3は用務系機能で、食糧庫や護衛、配送、厩舎、象舎、兵舎などが含まれる。

- 1) 宮廷系/Court: 大臣/Minister (various)、知事/Local Commissioner、同志/Comrade、護衛/ Guard、召使/Servant
- 2) 居住系/Residential
  - a) 王族/Royal Family: 王子/Prince、親族/Relatives
  - b) 公僕/Officer: 議員/Parliament Member
  - c) 宗教/Religion: 寺院/Pagoda
- 3) 用務系/Utility: 食糧庫/Granary、弾薬庫/Artillery、配送/Courier、厩舎/Horse、象舎/Black Elephant兵舎/Soldier; Indian Soldier; Warrior; Trooper

これらの区分により、ペゲーの土地利用を整理すると図8のようになる。これをみると、ペゲー王都の土地利用は内側から外側に向かう帯状の、同心周帯と呼ばれる形態をとり、宮廷系の機能は王宮に隣接する王都内側に、また用務系機能は王都の外周に近い外側に多く配置されていることが解る。

### (4) ペゲーモデルの提示

これまでの検討により、ビルマ王都には、筆者の先行研究で明らかにした方形の各辺に3門がある「3門モデル」に加え、方形の壁に囲まれ、各辺には5門があり、それらをつなぐ道が5本ずつの通りがブロックを区分する「5門モデル」があることが解った。本論文では、そのモデルの特徴を、ペゲー、トウングー、シュエポーの空間構造、土地利用、軸性を検討した。

これらの特性を集約し、ペゲーおよびビルマ王都の新たな都市モデルとして生成したのが図9である。また、先行研究において提示した各辺3門モデルと、本論文で提示した各辺5門モデルの比較を表4に示した。

## 3. 討議

### (1) ビルマ・モデルの系譜

ビルマ王都のモデルは、先行研究で提示したマンダレー (3門) モデルと、本論文で提示したペゲー (5門) モデルがあることが解明された。本項では、ビルマ王国における都市モデルの全体像について、これら二つのモデルを含めた都城モデルの系譜として論じる。

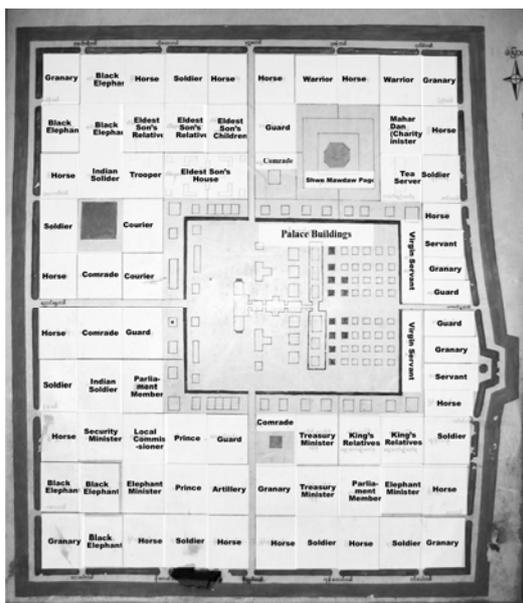
#### 1) マンダレー (3門) モデル

マンダレーモデルは、ビルマ王国最後の王都であるマンダレーの空間構造の分析により提示された。このマンダレーモデルは、どのような経緯で形成されたのだろうか。

マンダレーの王都を建造したミンドン王は、マンダレーに先行する二つの王都、すなわち 1782 年のアマラプラ創建と、1763 年のインワ再建の事例を参考にせよ、と命じている<sup>24)</sup>。このことから、マンダレー王都は、直近の王都アマラプラと、その前の王都であるインワがモデルとして意識されていたことが理解される。

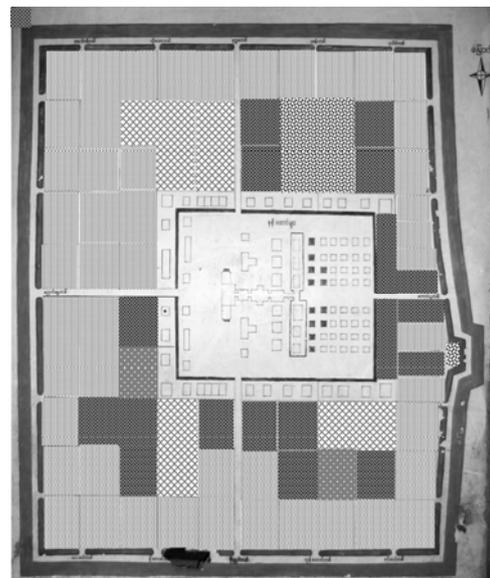
それではインワは、何をモデルに建造されたのだろうか。インワはビルマ王国の最後から 3 番目の王都として 19 世紀中ごろまで王都の地位にあったが、その創建は 14 世紀に遡ることはすでに述べた。すなわちインワはおよそ 500 年間ほど、幾度も再建・遷都を経験しつつ王都として維持されたことになる。

インワの創建は 1364 年になされ、これはバガン王国が滅亡した 1287 年から 80 年あまり後のことである。その後インワは 16 世紀末まで、ビルマ内陸に勢力を持ったアワ王国の王都として維持された。この時代、ビルマは上ミャンマーのアワ王国と海岸に近いペゲー王国が勢力を競ったが、17 世紀初めにトウングー王国がビルマを統一し、統一王国の王都はトウングーへと移った。トウングー朝においても王都はトウングー、ペゲー、インワの 3 か所を変遷し、インワは 17 世紀から 18 世紀にかけて 2 度、王都となっている。また、ビルマ最後の王朝であるコンバウン朝においても、インワは 2 度にわたって王都となっている。



出典: Kambawzathadi Palace & Museum, 布野, 153, translation to English by the Author

図7 ペゲー王都の土地利用

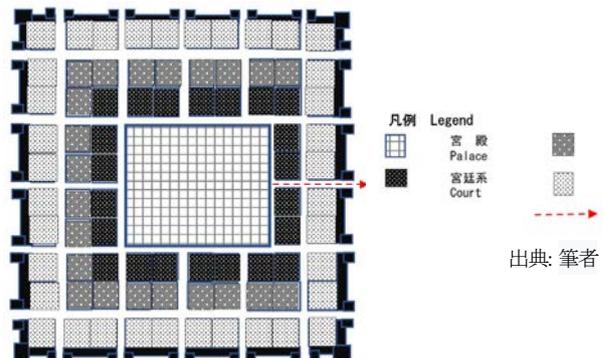


凡例 / Legend

宮廷系 Court 王族/Royal Family 公僕/Officer 宗教/Religion 居住系 Residential 用務系 Utility

出典: Kambawzathadi Palace & Museum, 布野, 153, analysis of land use by the Author.

図8 ペゲー王都の土地利用分析



出典: 筆者

図9 本論文で提示するペゲー(5門)モデル

表4 マンダレーモデルとペゲーモデルの比較

項目 Item	ビルマ Burma	
	マンダレー (3門) モデル (Mandalay, Inwa & Amarapura)	ペゲー (5門) モデル (Pegu, Toungoo & Shwebo)
基本構想 Basic Plan	同心周帯 Concentric circum-ambient belts	同心周帯 Concentric circum-ambient belts
基本形態 Shape	非等方性 Non-isotropic (東向き軸性 Eastward axis)	非等方性 Non-isotropic (東向き軸性 Eastward axis)
核心施設 Central facility	中央宮闕 Palace	中央宮闕 Palace
宗教施設 Religious facility	左祖右社 Mausoleum on the left (North); Shrine on the right (South)	不詳 Not clear
官衙・市 Administration and Commerce	中朝外役 Court in inner belt; Utility in outer belt	中朝外役 Court in inner belt; Utility in outer belt
民間住居 Residence	中周民廬 Intermediate belt	中周民廬 Intermediate belt

出典: 著者

こうした長い王都としての歴史の中で、インワの内城は少なくとも3度の再建を経験している。1度目は1597年、ニャウンヤン王の治世下、2度目はシンビューシン王治世下の1763年、そして最後はバジドー王治世下の1832年である<sup>29)</sup>。インワが創建当時からマンダレーモデルと呼ばれる各辺3門の都市モデルによって建造されたのか、あるいは3度の再建のいずれかの際になされたのかは、今後の検討を待つ必要がある。ただし再建をされた内城の位置は大きく変化しておらず、おそらく空間構造も大きな変化はなかったのではないかと推測される。

バガンの王都が各辺3門を持つことから、マンダレーモデルの最古の適用事例と考えられる。バガンの創建は849年(あるいは850年)とされるが、創建したのがどのような民族か(ShanあるいはMonか)といった点は解明されていない。また創建当時の空間構造を論じるための資料も乏しい。こうしたことから、各辺3門の空間構造が創建当時から供えられた特性であるかどうかは、今後の検討を待つ必要がある。

なお、バガンは11世紀に全土の統一を果たすが、Kan Hlaによれば、その統一王朝治世下の1084年にはTharabar門の再建がなされ、その際に城壁も一部修復がなされた、としている<sup>29)</sup>。後に繋がるビルマ王国の都城建設のモデルとしてバガンが建造されたのは、この時であったのかもしれないが、この点も今後の検討が必要である<sup>30)</sup>。

## 2) ペゲー(5門)モデル

他方、四辺形の各辺に5門を有するペゲーモデルがビルマ王国に登場するのは、王都トウングーが最初である。トウングーはビルマの南東部、シッタン川沿いに立地し、バガンの滅亡とほぼ同時期、1280年に創建された。南部地域を支配するタイ族から逃れるビルマ人が多く移り住んだ都市である<sup>27)</sup>。

トウングーが実現した各辺5門の都市モデルを引き継いだのはペゲーである。ペゲーには14世紀中ごろにMon族によって建造されたが、これは16の角を持つ多角形の城壁をもつ都城であった。正方形の都城の各辺5門の都市モデルが用いられたのは、バインナウン王が王都をトウングーから移すために1553年に建造した新都においてである。

なお、ビルマ王統史の一つである16世紀に編纂されたバインナウン王の半生を記載するハンタワディ・シンビューシン王統記(Hanthawaddy Hsinbyushin Ayedawbon)では、バインナウン王の功績であるペゲーの王都について20の門や主要な建物の名称を記載し、さらに「ペゲーは、三重の城壁をもち、トウングーとアユタヤの王宮をモデルにした<sup>31)</sup>」、と記している<sup>28)</sup>。

アユタヤは1351年に創建されたタイの都城であり、四方を川と運河に囲まれている<sup>29)</sup>。バインナウン王はタイを攻め、チェンマイやアユタヤを陥落させている。ただし、アユタヤからトウングーあるいはペゲーへの影響については、王統記の記載は具体性に掛ける面もあり、さらに検討する必要がある。

その後、各辺5門を有するペゲーモデルを継承するのは、コンバウン朝をスタートしたアラウンパヤ王が1752年に創建したシュエポーであった。アラウンパヤ王は、イラワジ川西岸、後のシュエポーのすぐ西にあるモクソボという村の出身であり、トウングー朝末期にインワ王国のチーフとして仕えた。シュエポーは王のふるさとに遷都した都城である。

このように、各辺5門のペゲーモデルは、トウングー、ペゲー、シュエポーと継承され、ビルマ王国の王都のモデルとして確立された。

## (2) ビルマモデルの性格・位置づけ

筆者の先行研究では、マンダレーモデルが、古代インド、古代中国それぞれのモデルと一定の類似点と相違点を持っていることを示した。本論文では、ビルマにおける都市モデルと呼ぶべきものは単一ではなく、少なくとも「3門モデル」と「5門モデル」の二つがあることを示した。先行研究ではビルマの都市モデルの性格については深く議論されていなかったため、この点を本項で議論する。

ビルマが古くからインドの影響下にあったことはよく知られる。Coedèsは、ピュー王国において二つの仏教の部派があり、一つは上座部でこれはパーリ語を用い、もう一つは根本説一切有部で言語はサンスクリットを用いた。11世紀になると上座部の教えを配下のビルマ人に布教することが認められ、バガンにおいて上座部の基盤が固まった<sup>30)</sup>。以降、ビルマ王国はコンバウン朝の終わりまで上座部仏教の教えを信奉している。このことから、ビルマ王都の建設についても宮廷において共有されていたインド由来の知識が活用されたものと思われる。

そのことの証左の一つとして、18世紀中ごろにシュエポーを創建したアラウンパヤ王が古代の都がどのように建造され、また新たな王朝において王がなすべきことを賢者に尋ねたという場面が、ビルマ勅令集にある。王は、占星術やマントラの揭示、ビシュヌやアスラなどインド神話の神々の象を掲げることに加え、王都が宇宙を模して造られ、宇宙の中心に位置するメール山を表象する中央の塔が王都の中央に聳えること、と助言されている<sup>30)</sup>。このことから、ビルマ王国においてインドに由来する都城モデルが意識されていたことが解る。

11世紀中ごろから広がった上座部仏教は王都のモデルに影響を与えたと思われる。Coedèsは12世紀はビルマに

においてはパーリ語の文献が多く書かれたことなど、文化的な進展があったとしている<sup>32)</sup>。上座部仏教では、悟りをひらいたとき、仏陀は東を向いて座していたとされる<sup>33)</sup>。ビルマモデルにみられる東向きの軸性は、このことと関連付けられと思われる。

これと対照的に、ビルマと中国との関係は主として交易を中心とするものや競合の関係であった。現在の中国雲南省のあたりにあった南詔がピューを攻撃したことはすでに述べた。バガン王国の最後のころは、中国を逃れたモンゴル王の攻勢にさらされていた<sup>34)</sup>。中国との外交関係が樹立されるのは1769年のカウントン条約以後のことで、1787年から1823年までに外交使節の交換が行われた<sup>35)</sup>。

20世紀初頭のマンダレーに関する文献には、マンダレーの計画を中国の影響とするものがあつた<sup>36)</sup>。また、Duroiselleはこれを受け、より具体的にマンダレーは1264年にフビライ汗が建造した首都・北京をモデルにしたと記述した<sup>37)</sup>。しかし、近年はこうした論説は否定されている。Mooreは「マンダレーの先行事例として、ミャンマーのよく知られる都城であるトウングーやアワ（インワ）、アマラプラなどの特徴が挙げることができ、中国のプロトタイプと関係づける必要はない<sup>38)</sup>」とした。また、大野は、マンダレーの王都は従来からのビルマの王都であるアワやアマラプラをモデルに計画された、としている<sup>39)</sup>。

インドで蓄積された都城の建設に関する知識はビルマ王国の朝廷において共有・研究されていたと思われることから、ビルマモデルは古代インドモデルを踏襲したものと思われる。したがって、ビルマモデルは古代インドモデルの下に位置付けられ、一定の地域固有の要素が加えられたサブモデルの一つとすることが適切と思われる。

本論文では、ビルマモデルのもう一つの類型としてペグー（5門）モデルを提示した。布野によれば、5門モデルはマーナサーラにおいてウグラビータと呼ばれるものである<sup>39)</sup>。ウグラビータは、正方形を6x6分割するものであるが、布野はメール山の頂上の配置を示すBrauenによる図を示している<sup>40)</sup>（図10）。この図では32の小方形と中央の4区画を占める王宮を合わせて33の神々と重ねており、これはシュリクシェトラの構成とも類似するものである。シュリクシェトラに見られるヒンズー・仏教的な宇宙観を5門モデルが引継いだとの推測も可能であろう。

### (3) 近隣地域の他のモデルとの関係

提示したビルマの3門、5門モデルはインドシナ半島など、近隣地域における唯一のモデルではないものと思われる。ビルマ王国との競合関係がよく知られているアンコール王国は、アンコールワット、アンコールトムなどの都城を建造している。アンコール王国衰亡のあとはカ

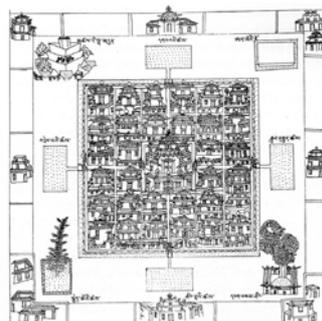
ンボジア王国がウドン、プノンペンなどの王都を建造している。タイではスコタイやアユタヤに続いてトンブリ、ラタナコシン（現在のバンコク）が建造されている。北地ではランナー王国の王都としてチェンライ、チェンマイが建てられている。ラオスではランサン王国がルアンブラバン、ビエンチャンを建造した。ベトナムでは阮朝の王都としてフエ、サイゴンがインドシナ半島の近隣地域の都城との関係がある可能性がある。

これらの都城の空間構造について、古代インドモデル、あるいは古代中国モデルとの関係について今後研究が必要であり、地域ごとのサブモデルの関係性もこうした研究から明らかになることが期待される。

## 6. 結論

本研究は、その1研究と併せて、植民地化以前のビルマ王国の歴史的王都の都城モデルを明らかにすることを目的に行った。本論文の結論を以下に述べる。

- ビルマ王国の王都モデルは、先行研究において提示されたマンダレーモデルと、本研究で示されたペグーモデルの、少なくとも2つのサブモデルから構成される（図11）。
- 本論文で提示したペグーモデルは、歴史的王都のうち、トウングー、ペグー、シュエボーの3つにみられ、方形の各辺に5門を有し、同心周帯の土地利用パターンと東向きの軸性が見られる。
- ビルマの都城モデルの系譜は、マンダレー（3門）モデルがバガンからインワ、アマラプラ、マンダレーと継承され、他方ペグー（5門）モデルはトウングーで最初に使われ、ペグー、シュエボーへの継承された。すなわち二つの都城モデルがバガン朝以降、ビルマ王国の歴史的王都に順次、継承された。
- ビルマへのインドおよび中国の影響の検討により、ビルマ王国の王都は主として宮廷で共有されていたインドの都城モデルの知識に即していると考えられる。したがって先行研究のマンダレーモデル、今回示したペグーモデルは、いずれも古代インドモデルのサブモデルと考えるのが適切と思われる（図12）。
- ビルマの都城モデルは、近隣国であるタイ、カンボジアなどの都城とも関連が深く、これらとの対比も今後の課題である。



出典：布野 P. 153, Brauen 1997原図。

図10 須弥山周辺の概念図

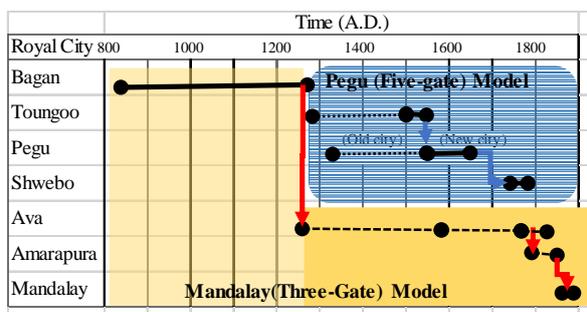


図11 ビルマ王国の王都モデルの系譜



Notes A1: India model and its influence (by Ohji)  
 A2: China model and its influence (by Ohji)  
 B: Burma model(s) (by the Author)  
 出典: 応地, 529をもとに筆者が加筆

図12 古代インド、古代中国モデルの影響範囲とビルマモデル

脚注

<sup>1)</sup> 古代インドモデルにおいて一定の方位の優先が見られることがある。応地はヒンドゥー・インドにおいて東をもって最尊とする方位感があるとしているが、それが都城の内部編成において方向的偏りを生み出すことはない、としている[応地 2011, 88]。  
<sup>2)</sup> シュエボの門数について、ビルマ王国の勅令を編纂した *Royal Orders of Burma* では、シュエボ創建の際に、12の門に名札を掲げ、城壁の建造が完了した<sup>7)</sup>とあり、城外を結ぶもつとも北の1つを除外すれば東側は4門となり、東西南北の門数が4、2、3、3と合計12となる。この点を見ると、シュエボは各辺3門、合計12門のマンダレーモデルの変異したプランとみることも可能と思われる。この点もさらなる検討が必要である。  
<sup>3)</sup> バガンとインワに共通する特性がみられる。バガンとインワの都城は、ともにやや東西が南北に比べて長い、長方形に近い方形であることを指摘することができる。  
 また、インワは広い平坦な地勢に恵まれているものの、王都、すなわち内城はその北東で、北面にイラワジ川、東面をイラワジ川支流のミッティング川と、2面を水面に接する角地に形成されている。バガンの場合は、北側と西側をイラワジ川が流れており、南および東に向かって平坦な地勢が広がっているが、王都は川に2面を接する角地に置かれている。バガンとインワは東西を軸に裏返したような配置になっている。  
<sup>4)</sup> ハンタワディ・シンビューシン王統記がどのような観点でアユタヤがビルマ王都のモデルになったと記載したのかは、引用文献には説明されていない。アユタヤは4面を川や運河で囲まれるタイに特有なスタイルの王都であるが、そうした点はトウングーやペグーでは共有されていない。引用文献にある三重の城壁とは、おそらく城壁と濠により囲まれる王都、宮殿や謁見棟などをもつ王宮、そして王や家族のプライベートな空間である宮殿の3つの城壁を指すと思われる。  
<sup>5)</sup> ビルマ王国の王都、王宮は東向きが多く、またビルマ語では東は「表」、西は「裏」という意味を持つ。こうしたビルマ伝統的な解釈に反する西向きが不都合と考えられたため、再建の際に変更された、という推測である。

参考文献

1) Yamada, K.: Research on the spatial structure of outer city of Burmese capital cities - from an analysis of Mandalay, the last royal city of Burma, *Urban and Regional Planning Review (URPR)*, Vol.6, pp.22-44, 2019.  
 2) 山田耕治 (2020)、「ビルマ (ミャンマー) の歴史的王都の都市モデルの提示に関する研究 - マンダレーを事例とする古代インドおよび中国モデルとの比較考量」、こうえいフォーラム, pp.49-57、2020年3月。(https://www.n-koei.co.jp/rd/thesis/)  
 3) Yamada, K.: A Research on the Applicability of the Mandalay Model to

Other Historical Capital Cities of the Burmese Kingdom, *Journal of Japan Society of Civil Engineers (JISCE)*, Forthcoming.  
 4) 山田耕治 (2021)、「ビルマ都城モデルの研究 (その1): マンダレー都市モデルのビルマ王国の他の歴史的王都への適用性に関する研究、土木学会土木史研究講演集 (予定)、2021年」。  
 5) 応地利明、都城の系譜、京都大学出版会、p.82, 2011.  
 6) Kirk, W.: Town and country planning in ancient India according to Kautilya's Arthashastra, *Scottish Geographical Magazine*, Vol. 94, No. 2, p.71, 1979.  
 7) Ge Feng and Zhengming Du: *Traditional Chinese Rites and Rituals*, Cambridge Scholars Publishing, p.12, 2015.  
 8) 応地前掲書, p.74.  
 9) Yamada, op.cit.  
 10) 山田前掲書  
 11) Chotima Chaturawong, Tawan Weerakoon & Pongpon Yasi, *Ayutthaya and Burma* (2018), NAJUA Architecture, Design and Built Environment, Silpakom Univ., Vol. 33, P.A-46, 2018.  
 12) Phone Kya, Thanegi and Tet Soe, *Guide to Bago - The Ancient Royal City of Hanthawaddy*, Yangon, P.52, 2016.  
 13) Chotima, op. cit., P.A.45.  
 14) Chotima, op. cit., P.A.47  
 15) Kan Hla, *Traditional Town Planning in Burma*, *Journal of the Society of Architectural Historians*, University of California Press, Vol. 37, No. 2, p.96, 1978.  
 16) Langham-Carter, R.R., *Alompra's Shwebo*, *Journal of the Burma Research Society*, Vol. XXIII, pp.1-12, 1933.  
 17) Than Tun, *The Royal Orders of Burma* [ROB] in 10 vols., the Center for Southeast Asian Studies of Kyoto University: Vol. III, p.2, 1983-1990.  
 18) Aung-Thwin, M. and Aung-thwin, M.: *A History of Myanmar Since Ancient Times*, 2nd Ed. London, p.305, 2013.  
 19) Chotima, op. cit., P.A.45.  
 20) Phone Kya et al., op. cit., P.50  
 21) Thaw Kaung, *Myanmar Wonderland*, Yangon, P.58, 2014.  
 22) Langham-Carter, op. cit., P.6.  
 23) 布野修司、曼陀羅都市、京都大学出版会, p.153, 2006  
 24) Yamada, op.cit, p.31.  
 25) Aung Thaw, *Historical Sites in Myanmar*, P.127, reprint by Ministry of Religious Affairs and Culture, Myanmar.  
 26) Kan Hla, *Development and Town Planning*, *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 36, No. 1, P.29, 1977.  
 27) Coedès, G.: *The Making of South East Asia* [Translated from the French by H. M. Wright: *Les peuples de la péninsule indochinoise. Histoire, civilisations*, Dunod, Paris, 1962], Routledge and Kegan Paul, London, p.181, 1965.  
 28) Thaw Kaung, *Ayedawbon Kyan, An Important Myanmar Literary Genre Recording Historical Events*, *Journal of the Siam Society*, 88, P.28, 2000.  
 29) Moore, E., P. Stot and Suriyavidi Sukhasvasti, *Ancient Capital of Thailand*, River Books, New York, P.242-243, 1996.  
 30) Coedès, op. cit., pp.111-114.  
 31) ROB, Vol. III, P.9.  
 32) Coedès, op. cit., p.121.  
 33) Than Tun: A Bagan Temple's Main Gate: is there any significance when it opens in any other direction except east?, *Myanmar Historical Research J.*, No.2, p.106, 1988.  
 34) Aung-Thwin, op. cit., p.99.  
 35) Aung-Thwin, op. cit., p.164.  
 36) Scott, G.: Note on Town-planning, *Appendix; Report of the Suburban Development Committee*, Rangoon, p.87, 1916.  
 37) Duroiselle, C.: *Guide to the Mandalay Palace*, Rangoon, p.11, 1925 (Second Edition, Calcutta, in 1931).  
 38) Moore, E.: The Reconstruction of Mandalay Palace: An Interim Report on Aspect of Design, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Univ. of London, Vol. 56, No. 2, p.338, 1993.  
 39) 大野徹、ビルマの王都マンダレー、*東南アジア研究* (1983), 21(1): 82-96.  
 40) Funo, o. cit., p.49.

(2021. 4. 19 受付)